「男、突っ走る！」

第85回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内	雅也	（23）	『オフィスツリーイン』代表
国枝	佐代子	（58）	市民映画プロデューサー
本村	晴臣	（54）	音楽プロデューサー
橋崎	悟	（48）	ＷＥＢ会社社長
橋岡	直政	（46）	舞台俳優
山森	直海	（18）	『スリジェネ』メンバー
富永	茜	（22）	『スリジェネ』メンバー
佐藤	麻美	（21）	『スリジェネ』メンバー
大坂	美央	（16）	『スリジェネ』メンバー
花木	忍	（23）	『スリジェネ』メンバー
熊瀬	怜奈	（17）	『スリジェネ』メンバー
長野	優美	（17）	『スリジェネ』メンバー

1　南公民館・大会議室

ピアノを弾いている本村――それに合わせて歌っている直海、茜、麻美、美央、忍、怜奈、優美。

2　同・廊下

歌声がかすかに聞こえる中、雅也と佐代子が話している。

雅也「団体登録ですが？」

佐代子「そう。団体登録を公民館にすれば、プリンターとかも使えるし、打ち合わせコーナーとかホールの貸し出しとかもできるようになるの。これから、公民館を使うことも増えていくし、抽選にはなるけど団体としてロッカーも使えるようになるの。登録しておいて、損はないと思うけど」

雅也「分かりました」

佐代子「じゃあ、なるべく早めに登録しといてね。団体登録には、団体の概要が分かる書類が必要だから、規約も作るようにして」

雅也「じゃあ、早速橋崎さんに頼んでみます」
佐代子「よろしくね」

3　同・大会議室

ピアノを弾いている本村――それに合わせて歌っている直海、茜、麻美、美央、忍、怜奈、優美。

4　同・廊下

雅也がスマホで話している。
雅也「そうなんです。団体登録のために、規約が必要になるので、その作成を至急お願いしたくて」

5　コンビニ

駐車場に停めている車の中で、スマホで話している橋崎。
橋崎「（不機嫌そうに）だから、先月の運営会議で団体規約を作った方が良いって言ったのに。結局遅かれ早かれ、規約は必要だ

ったんだよ。それなのに、後回しにするから」

雅也の声「すいません」

橋崎「いや、うっちーは謝ることないでしょ。あの時、うっちーだって規約を作ることには賛成してた。自分の都合で、いろいろ言われても困るんだよね。まあ、作れって言うなら作るけど、これを機に『スリジェネ』の運営から撤退しようかと思ってる」

雅也の声「え……どうしてですか」

橋崎「元々僕は、國村さんと知り合って、『ぷれいす』のウェブ担当って形で携わらせてもらった。でも、『スリジェネ』の母体扱いだった『ぷれいす』がなくなった今、僕がいる意味ももうないような気がしてね」

6　南公民館・廊下

雅也「橋崎さん……」

橋崎の声「ホームページはヤマさんやうっちーでも更新できるようになってるし、ＳＮ

Sの更新はとみーやコウタがやってくれる。
僕が残る意味はないでしょ」
雅也「でも……」

7　コンビニ
橋崎「国枝さんには自分から伝える。規約は、ちゃんと作ってメールで送るから。それじゃあ」

8　南公民館・廊下
険しい顔でスマホをしまう雅也、溜息をつく――と、茜が出てくる。
雅也「あれ、休憩？」
茜「うん、十分休憩」
雅也「そっか」
茜「中にいれば良いのに。演劇祭の準備もあるでしょ」
雅也「いや、稽古中に邪魔になると思ってさ。それに、橋崎さんと電話もしてたから」
茜「電話？」

雅也「国枝さんから、規約を作るように指示があってね。あれ、国枝さんは？」
茜「ちょっと顔見せたら、すぐ帰っちゃった」
雅也「そっか」
茜「それで、規約がどうしたの？」
雅也「規約を作るように、橋崎さんにお願いしたんだけど、橋崎さん、機嫌損ねちゃって」
茜「どうして？　あ……団体規約といえば、先月の運営会議の時……」
雅也「そう。オーディションの準備を最優先するようにって、国枝さん、規約作るのは後回しで良いって言ったでしょ。でも、公民館を使うにあたっては、団体登録を公民館に届け出として出した方が良いから、早急に作るように言われてね。どっちにせよ、規約はあったがほうが良かったんだよ」
茜「うっちーも大変だね。いろんなところで板挟みにあって」
雅也「板挟みか……」

茜「だってさ、最近運営会議の時も、ヤマさんと国枝さんがずっと喋って、私やコウタはどちらかといえば何かあったときに意見を言って、橋崎さんは国枝さんとたまにバチバチ担って、代表なのにうっちーがすごく小さくなってる気がするしさ」

雅也「それは、俺自身が一番実感してる……」

茜「……」

雅也「いずれ国枝さんから報告があると思うけど、橋崎さん、運営辞めるって」

茜「え……？」

雅也「俺と橋崎さんってね、シニア向けのフリーペーパーを作ってるスタッフを一緒にやってて、国枝さんとはそこで知り合ったの。『七夕物語』も、元はそのシニア向けのフリーペーパーのグループが事務局になるっていう扱いだったから、俺も橋崎さんも国枝さんから誘われて、運営事務局に入ったんだよ」

茜「そういえば、当時のオーディションとか

で、問い合わせ先が確か『ぷれいす』って
書いてあったね」
雅也「そう。でも、その『ぷれいす』がなく
なった今、橋崎さんとしては、国枝さんと
バチバチになってでも残る意味がないって
思ったんだろうね」
茜「……」
雅也「橋崎さんが抜けたら、橋崎が担当して
た事務方の仕事は、ほとんど俺が引き継が
なきゃな。もしかしたら、稽古管理とか事
務的な作業、とみーに手伝ってもらうこと
になるかもしれないけど、大丈夫？」
茜「私は良いよ、何でも手伝うから。ただ、
私はうっちーのことが心配で」
雅也「……」
茜「国枝さんから代表継いでから、うっちー
ちょっと痩せたんじゃない？　何か、顔の
血色も悪いしさ」
雅也「そうかな？」
茜「うん」

雅也「とみーも、管理栄養士の受験勉強が忙しいのに、申し訳ないね」

茜「事情を抱えてるのは、みんな一緒だよ。ナオやミオやレイナは高校生だからテストもあれば部活もある、レイコ姐さんは教員だから仕事だって忙しいだろうし、ショウやアサミンだって大学があるし、マリエだって歯科衛生士の国家資格控えてる。うっちーなんか、自分の仕事のこともあるでしょ。みんなそれぞれに何かをしながら、『スリジェネ』をやってるんだもん。事務仕事の一つや二つ、私も手伝うから」

雅也「ありがとう。やっぱり、とみーを運営に誘って良かった。もちろんコウタも」

茜「今でこそ、うっちーは代表専任になっちゃったけど、どんな形だろうと、うっちーは一期生で私たちと同じメンバーってことに変わりはないでしょ。運営がいなかったら、私たちは『スリジェネ』としての活動はできないんだから。ライブハウスの見学

だって、うっちー行ってくれたんでしょ。運営が下見をして、現地の人と話をしてくれたから、企画が形になるわけだから、私たちはもっと運営に積極的になっても良い気がするんだよね。運営に全部任せるんじゃなくて、私たちでやってみたいこととか、そういうことをもっとメンバーから募っても良い気がする」

雅也「確かに、そういうのも良いよね。メンバーから、やってみたい企画を募集するとか」

茜「そうそう。運営から、『はい、次これ出るよ』って一方的に言われたって、スケジュールのこともあるだろうしさ」

雅也「スケジュールか……。ちょうど今、本番に向けての暫定的なスケジュール作ってるんだけど、全然分からないでしょ。やっぱり、阿川さんに演出助手に入ってもらったほうが良いかな……」

茜「うっちーの負担を減らすんだったら、そ

ういう人に頼んでも良いと思うよ。分からない人がずっと分からない状態でいたら、困るのはキャストであるメンバーなんだから」

雅也「そうだよね」

と、大会議室から怜奈が出てくる。

雅也「お疲れ、レイナ」

怜奈「あのさ、うっちー。ちょっと相談があるんだけど」

雅也「どうしたの？」

怜奈「私、演劇祭出られない……」

雅也「え？」

茜「どういうこと？」

怜奈「演劇祭って、年明け二月の二日でしょ。私その日、学校で模試があるの」

雅也「そっか……」

茜「じゃあ、稽古に来ても、することないってことだよね」

雅也「まあ、本番に出られないってなるとね……」

怜奈「ごめんね」
茜「まあ、学校の、しかも模試だったら仕方ないよ。模試休んで本番出ろとは言えないし」
雅也「そうだね……」
茜「どうする？」
雅也「登場人物を削るしかないでしょ。二役やってもらうのは、物理的に無理だろうし」
茜「それしか方法ないか」

9　木内家・雅也の部屋（夜）

パソコンで原稿を直している雅也。
N「その日のうちに、僕は運営にレイナの件を伝え、脚本の修正対応に追われました。脚本の修正をすることは、仕事でも既に経験済みでしたが、何より運営グループＬＩＮＥを通じて国枝さんに報告することが、妙に気の重いタスクになってしまっていました。また、ヤマさん経由で話が行き、演出補助として阿川さんが入ることが正式に

決まったのです」

10　同・全景（翌朝）

11　同・雅也の部屋

プリンターから、書類が印刷される―

―『スリジェネ』の規約である。

雅也、それを手に取って、内容を確認する。

N「翌日になって、橋崎さんから『スリジェネ』の団体規約のデータが、メールで送られてきました。橋崎さんが、国枝さんに報告したのち、『スリジェネ』の運営を辞めたのは、それからしばらく経ってからのことでした」

12　ライブハウス・表（夜）

N「九月最終週の土曜日、ライブハウスで『スリジェネ』選抜歌唱メンバーによるステージが開催されました。この日は、他に

も二団体が参加をしていたため、それぞれのファンと思われる観客たちも数多く来ていました」

観客の列ができている――その中に、橋岡の姿もある。雅也がやってくると、

雅也「はっしーさん」

橋岡「おお、うっちー」

雅也「来てくださったんですか」

橋岡「選抜メンバーによるライブでしょ。ぜひ歌を聞いてみたいと思って」

雅也「ありがとうございます。メンバーも喜びます。では、また後ほど」

13　同・楽屋

直海、茜、美央、忍、怜奈、優美、本村がそれぞれ準備をしている――ノック音がして、雅也の声がする。

雅也の声「うっちーだけど、入って良い？」

直海「どうぞ」

と、ドアが開き、雅也が入ってくる。

雅也「表にはっしーさんがいらしてた。選抜メンバーの歌を、ぜひ聞きたいって」
本村「そっか。はっしー、来てたんだ」
美央「（色紙を雅也に渡して）うっちー、これとみーから。アサミンの色紙書いてくれって」
茜「今日急遽準備したの。うっちーも、空いてるときに書いといて。ライブ終わったら、サプライズでアサミンに渡すから」
雅也「了解。そうだよね、今日が最後だからこういうことしなきゃね。準備してくれてありがとう」
茜「これぐらい大したことないわ。あ、そうだ。うっちー、ライブ中、私たちの様子動画で撮影してくれない？」
雅也「良いけど」
麻美が戻ってくる――雅也、慌てて色紙を隠す。
麻美「今のうちにトイレ行った方が良いよ。結構混みそうだから」

優美「分かった」
忍「私も今のうちに行っとこ（と出ていく）」
雅也「（茜に）動画撮る分には、別に良いけど、何かに使うの？」
茜「ダイジェスト動画みたいに、簡単に編集したやつを、『スリジェネ』のＳＮＳにアップしようと思って。せっかくなら、宣伝活動もちゃんとしなきゃね」
雅也「何から何まで、ありがとう」
茜「言ったでしょ。運営でできることがあれば、私もやるって」
雅也「頼りにしてます」
茜「（スマホを渡して）じゃ、よろしく」
雅也「オッケー」

14　同・会場

観客たちが集まっている――その中に動画撮影の準備をしている雅也、佐代子、橋岡の姿もある。
ステージでピアノを構えて座っている

本村。

本村「本日は、ご来場ありがとうございます。ここからは、『ハルｗｉｔｈスリジェネガールズ』でお届けしたいと思います」

拍手をする一同。

以下、本村のピアノと歌に合わせて歌うメンバーをカットイン。

×　×　×

歌っている直海。

×　×　×

歌っている茜。

×　×　×

歌っている美央。

×　×　×

歌っている忍。

×　×　×

歌っている怜奈。

×　×　×

歌っている優美。

×　×　×

歌っている麻美。

×　　×　　×

直海、茜、麻美、美央、忍、怜奈、優美が並んで、本村と共に歌っている。

その様子を見ている佐代子と橋岡。

茜のスマホで動画を撮影している雅也。

15　同・表

ライブ終了後。

観客たちがぞろぞろと出てくる――佐代子と橋岡が出てくる。

佐代子「はっしー、今日はありがとね」

橋岡「今回の選抜メンバー凄いですね。これからの成長が楽しみですよ」

佐代子「二月には、市民演劇祭に出るの。良かったら、見に来て」

橋岡「分かりました。また、ご連絡ください」

16　同・楽屋

麻美に寄せ書きの色紙を渡す茜――傍

らに雅也、直海、美央、忍、怜奈、優美。

茜「アサミン、今日までありがとう」

麻美「すごい、寄せ書き用意してくれたんだ」

雅也「また、いつでも遊びに来てね」

麻美「うん。うっちーも頑張ってね」

美央「アサミンがいなくなると、寂しくなるね」

直海「そりゃ、演技が上手くて引っ張ってくれたメンバーだもん」

麻美「これからは、ナオが演技の筆頭格になってね」

直海「いやいや、私なんてそんな」

忍「ねえ、みんなで写真撮ろうよ」

麻美「良いね」

怜奈「あれ、ハルさんは？」

17　同・表

佐代子、本村、橋崎が談笑していると、雅也、直海、茜、麻美、美央、忍、怜

奈、優美が出てくる。
雅也「ハルさんも国枝さんも、ここにいらしたんですか」
佐代子「どうしたの？」
忍「アサミンが今日で最後なので、記念写真を撮ろうと思って」
佐代子「良いわね」
橋岡「じゃあ、僕撮りますよ。皆さん並んでください」
忍「はっしーさん、ありがとうございます。じゃあ、お願いします（とスマホを渡す）」
集合写真のように集まる雅也、佐代子、本村、直海、茜、麻美、美央、忍、怜奈、優美。
橋岡「はい、じゃあ撮りますよ。はいチーズ」と、それぞれポーズをする一同。
橋岡「オッケーです」
一同「（それぞれに）ありがとうございます」
橋岡「素敵なステージでした。これからの『スリジェネ』の活躍が楽しみです」

雅也「ありがとうございます」

橋岡「次は演劇祭って、国枝さんから聞いたよ」

雅也「はい。来月から、本格的に稽古頑張ります」

茜「頑張ろうね、うっちー」

雅也「うん」

N「これが、アサミンにとって『スリジェネ』最後のステージとなりました。メンバーが一人いなくなることは寂しい思いでもありましたが、僕はこの時でも、市民演劇祭のことが頭の隅から離れず、何とかスムーズに稽古を進めていきたいと思っていたのでした」

つづく